

聖書 エゼキエル書34章1〜6節、ルカ福音書15章1〜10節

1〜2節は場面設定です。1節で徴税人や罪人がイエスの話を聞こうとして、イエスに近寄ってきたとあります。この様子を見ていたファリサイ派や律法学者たちは「この人（＝イエス）は罪人を迎えて、食事までしている」と言って不平を言いだしたのです。そこでイエスは次の3つの譬えを話されたのです。それが有名な99匹の羊を野原に残しても経った1匹の迷える羊を捜しに行く譬え話です。次に、家の中で銀貨をなくした女性の話であり、放蕩息子の話なのです。本日与えられた聖書箇所には、11節以下の放蕩息子の話は指定されていませんので、前半の2つの譬え話だけをします。

さて、場面設定の1〜2節を見ると、徴税人や罪人がイエスの話を聞こうと近寄ってきていたことがわかります。そして何が起こったのかを見ると、どうも、イエスがその徴税人や罪人と一緒に食事の席について食事をしていたか、よく一緒に食事をしていることが周囲の皆に知れ渡っていたようです。その様子を見て、ファリサイ派と律法学者が罪人を迎えてイエスが食事をしていることに不平を言いだしたのです。そこでイエスは4節以下にあるように3つの譬え話をされたのです。これは明らかにファリサイ派と律法学者の不平に対抗する譬え話です。3〜7節での「見失った」羊の話、8〜10節での「無くした」銀貨の話は、明らかに取税人や罪人が失われた存在であり、亡くした銀貨であるという話です。

どうしてイエスが徴税人や罪人を失われた存在だという象徴を用いて譬え話をしたのかは、ファリサイ派や律法学者がもしイエスがメシアであるならば、徴税人や罪人と一緒に食事をするはずがないと考えていたからです。当時、ファリサイ派や律法学者は徴税人や罪人と交際することはありませんでした。例えば、徴税人と売買取引をしてはいけないし、お金のやり取りも食事と一緒にすることも禁じられていました。なぜ徴税人や罪人と一緒に食事をしないのか。それは、徴税人や罪人たちが十分の一の献金をしていない可能性があるからです。それはファリサイ派や律法学者たちにとって、次のような危険性があるからです。それは、徴税人や罪人らが十分の一の献金をしていないならば、自分たちが食べた食物が本来神に返すものかもしれないからです。本来は神の分であるものを食べてしまう可能性があるからです。もちろん、徴税人は異邦人であるローマ人と交流するわけで、徴税人や罪人と交流すると、ユダヤ人が汚れてしまう危険性もあります。徴税人はローマの税金の取り立てを代理で行っていた人物ですから、十分の一の献金をするような人物とはみなされていません。そして、当時の罪人の代表的な存在と言えば、売春婦です。彼女らも十分の一の献金を貧しい生活の中からしている可能性は低いのです。

さて、譬え話の最初の見失った羊の譬え話ですが、この主人公は羊飼いです。羊飼いは羊を様々な場所に連れて行って食べさせるために、悪霊が跳梁跋扈する荒野にも行きます。荒野は当時汚れている場所と考えられていましたから、ファリサイ派や律法学者は羊飼いと決してかかわらなかつたのです。さらに、ファリサイ派の人は、こういう徴税人や罪人の前で悔い改めを勧めるような話をしません。なぜなら、徴税人や罪人がもしかしてそこで悔い改めてしまうと可能性があるからです。

それはファリサイ派や律法学者は罪人が悔い改めることがないようにしていたのです。つまり、彼らは徴税人や罪人の前で悔い改めの話をしないのは、彼らが悔い改めたらまずいと考えていたからです。つまり、罪人が悔い改めることは最初から拒絶していたのです。人間として非常に冷たい人格ですね。また、自分が汚れる危険性を極力避けて生きていたのですから、非常に自己中心的な生き方をしていたのです。こういう社会状況の中で、イエスは神の愛がすべての人に及んでいることを説いたのです。

このようにみえてみると、見失った羊の譬えに登場する見失われた一匹の羊は徴税人や罪人を象徴していることがわかります。7節で『悔い改める一人の罪人』と対比するかたちで、『悔い改める必要にない

九十九匹の正しい人』というのはフアリサイ派や律法学者のことです。7節の後半を読むと『悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある』とあることでもそのことはわかります。フアリサイ派や律法学者は自分たちがいまさら悔い改める必要性などみじんも感じていなかったのも、イエスは『九十九人の正しい人』と名ざしこそしないものの、彼らのことを皮肉っているのです。文脈の前提として迷い出た羊は、悔い改めたけれども、100匹の羊たちと一緒に生きていくことが難しくて家出したような状況だったことが想定されます。けれども、羊飼いはその一匹のために、九十九匹を放り出しても、捜しに行く人物なのです。その羊飼いの姿こそ神の本当の姿だというわけです。

つまり、この羊飼いは神の御旨を表しているのです。神は人間世界で義人にはなれないと決めつけられている罪人が悔い改めたならば、その人物を見つけ出すまで探し続けるお方だということです。もっと言えば、悔い改めていなくても、その人物から目を離したり、諦めて見捨てるようなことを神はなされないということです。そして見つけ出したならば、その羊を肩に担いで戻り、友だちや近所の人たちを呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろうということです。神の真心がわかりやすく言い表されている譬えです。

次の「亡くした銀貨」の譬えを見てくと、ドラクメ銀貨10枚を持っていた女性が、その内の1枚を家の中で無くしたのです。この女性も神を象徴している存在です。でも、フアリサイ派や律法学者にとってユダヤの女性は取るに足らない存在です。先ほど、男女平等の度合いを指数化した2023年版「ジエンダーギャップ報告書」が発表されましたが、日本は146カ国の内125位でした。おそらく、イエス当時のユダヤを調査したら、日本より低いことは確実です。当時のユダヤで女性の存在はとるに足らないものというのが一般的な認識で、そのような女性が悔い改めた罪人を探して、見つけたら大喜びするというのは非現実的な譬え話なのです。

さて、私たちは現実生活の中で、様々なものを失います。家族や友人、ペット、健康に加えて、夢や希望、そしていざれば自分の命を失います。できれば、避けて通りたい出来事ではありますが、喪失は人生とは切り離せず、また何も失わない人生が幸せとは言えない側面もあります。イエスがフアリサイ派や律法学者との問答の中で、あえて喪失のことを取り上げた意味を深く受け止めたい。人生で出会ってしまふ喪失を神は必ず回復させる方だと言っているのです。

6年前に亡くなられた聖路加国際病院名誉院長の日野原重明さんは、1コリント10章13節の「神は……あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」という言葉を引用して、喪失の真ただ中にいる人に向かつて「あなたは今悲しみの真只中において、一生自分は笑うことがないと思っっているかもしれない。でも、僕たち人間は時間がかかっても必ず悲しみを乗り越える力が備わっています。綺麗な花を見たり、素晴らしい音楽を聞いたり、友だちと心が通じ合えたり、そんな癒しの恵みを味わうことで、生きていてよかったですと思える瞬間が必ずやってきます。その時を信じて待つのです」（生きていくあなたへ）105歳 どうしても遺したかった言葉）と言っています。この言葉は、喪失の出来事は時間が解決するという意味ではありません。牧師の子どもとして育った日野原先生の言葉の背後には、神という主語を必ず補って読む必要があるのです。

神は大切なものを失って悲しむ人をいつも顧みていてくださる。イエスにはその確信があるからこそ、ここでフアリサイ派や律法学者たちの人間を冷たく見放す態度に対して、神の憐れみ深い愛の姿を描き出しているのです。喪失の出来事は確かにつらいことです。しかし、そのような人間の悲しみに心を砕いて見守ってくださる神が、いつも私たちのそばにいてくださるのです。この恵みに気づくためには、喪失の出来事に向き合わなければならない。なぜなら、そこに神の慈愛が注がれることに気づかされるからです。